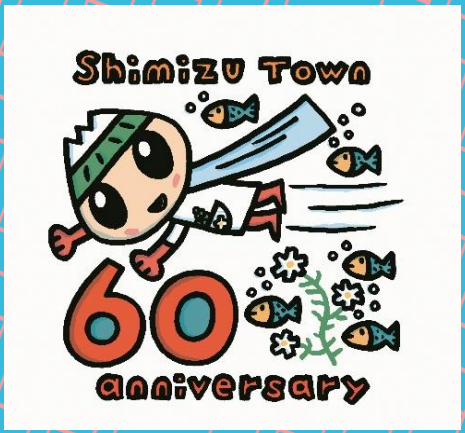
町制 60 周年
記念事業
わたしの主張



わたしの主張発表大会は、青少年が日常生活の中で考えていることを広く地域の方々に訴える機会として開催しています。主張を発表することにより、青少年自身が社会の一員としての自覚を高める契機にするとともに、青少年の主張を聞いた地域の方々に青少年の健全育成への理解と関心を深めていただくことを目的として行っています。

発表大会は新型コロナウイルス感染症感染防止により、昨年は３年ぶりに規模を縮小して会場にて開催しました。本年度は、新型コロナウイルス感染症の流行前の状態で、関係団体の方々にご案内を送付して開催しました。

日頃、青少年や青少年に関わる町民がどのようなことを考え、何を思っているのかを、８人の主張を通して少しでも知っていただけたら幸いです。

清水町

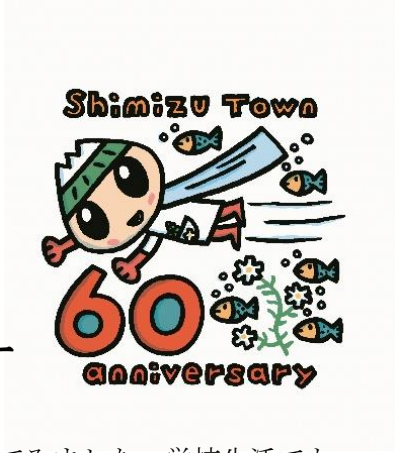
2023. 6. 17

主　張　発　表　集

町制 60 周年記念事業

わたしの主張発表大会2023

6月 17 日(土)　清水町地域交流センター



「夢に向かって」

清水町立西小学校　6年
堀内　円

私の夢は、看護師になることです。

私が一年生のとき、転んで打撲してしまい、整形外科に通うことになりました。その際、リハビリステーションで患者さんに、笑顔で接している看護師さんがいました。

（大変そうだなぁ。）

と思っていましたが、看護師さんは患者さんと向き合い、心から笑っているように感じました。私のことを対応してくれた人も、私の不安をやわらげるような、優しい笑みをくれました。大変さなんて少しも感じさせない対応に心を動かされたのを、今でも覚えています。この経験が、私が看護師になりたいと思ったきっかけの一つです。

もう一つは、ナイチンゲールの伝記を読んだからです。ナイチンゲールは、戦場にいる兵士のために、戦争という、自分が命を落とすかも知れない危険な場所でも助けに行ったようなすごい人です。私にとって、そんなナイチンゲールは、あこがれの人です。どんなに危ない場所であっても、仕事を全うするところにあこがれています。これが二つ目のきっかけです。

今私は、看護師になるために、どんなことをしていけばいいのだろうと、考え始めています。勉強はもちろん、ニュースや記事に掲載されていたり、流行しているウイルスや病気のことに目を通し、気になることを調べたりしたらいいのではと、少しずつですが始めてみました。学校生活でも、怪我をした人に声を掛けて、「どこが・どうして・どのように」を注意深く見るように心がけています。私たちの今の生活は、新型コロナとの戦いです。今現在でも「新型コロナウイルス」と戦う日々が続いています。まだまだ終わりではありません。ウイルスにより、私たちは三年生前期の、初めの二ヶ月間が休校になりました。ようやく友達に会えると思ったら、地区ごとの分散登校が始まり、全員に会えたのは六月のことでした。やっと再開したと思いましたが、私もみんなも楽しみにしていたプールや運動会などの学校行事のほとんどが中止になってしまいました。

（ウイルスさえなければ。）

と、何度も何度も考えました。

医療現場がひっ迫していることもニュースでたくさん聞きました。私が目指している看護師さんたちも大変な思いをして働いていることが、毎日のテレビ報道で流されていました。私が大人になったときに、ウイルスで左右されない、自由な世界になることを願い、コロナに対抗しようとする努力を、小さなことからでもしていきたいです。

私は、学校の委員会では体育委員会に所属しています。あまり外に出ない人や、運動が苦手な人が楽しく運動ができるようにすることで体力を向上させたり、筋肉を付けたりして、健康な体づくりをして欲しいと思います。そして、体に病気を抱えている人たちの手伝いをできるような委員会の一員になりたいと思います。

学校には、保健室があります。私は、どのような

人が保健室を利用しているのか気になって、調べてみました。保健室の先生に聞いてみたところ、全校児童四二十人中、休みの子の平均は一日五～六人程度だそうです。そして怪我をして利用した件数が二十六件、体調不良で利用したのが六件以上有ることが分かりました。私は、これからのためにも、怪我をした人や、体調の悪い人、また、何らかの理由で保健室にいる人々の支えになっていくことが、近道なのだと思っています。

世界には、さまざまな人たちがいます。体や心に病気や怪我を負ってしまった人や、体の弱い人などがいます。そして、そのような方々を支える人もいます。私は、一年生のときに対応してくれた看護師さんのように、優しくしなやかな人になりたいです。苦しんでいる患者さんを、一人でも多く笑顔にできるような看護師を目指します。

「本物のやさしさって何だろう」

清水町立清水小学校　６年
小野　杏奈

みなさんは『本物のやさしさ』って何だと思いますか。私は、その答えの１つは『人のために活動し、自分がされたらうれしいことをする』ことだと考えていました。そうすれば、みんなに喜んでもらえると思ったからです。私は積極的に『自分がされたらうれしいこと』をしていきました。そのたびに、いろいろな人から『ありがとう。』と言われるようになりました。しかし、喜んでもらえることばかりではありませんでした。自分がされたらうれしいことをしているのに、相手はそれほど喜んでくれないこともあったのです。それでも私はみんなのためになるようにがんばりました。なぜなら本当にやさしい人は、少しぐらいうまくいかないことがあっても、がまんして続けている人だと思ったからです。

しかし続ければ続けるほど、自分の心が苦しくなってしまうことを感じました。友達のためになると思ってしたことが、あまり喜んでもらえないことが続いたのです。『あなたのためにやさしくしてあげたのに、どうして喜んでくれないの？』時にはケンカのようになってしまうことがふえてしまったのです。そのようなことが続いた結果、わたしは何かがちがうのかもしれないと思い始めました。そこでなやんだあげく、母に相談することにしました。母はわたしにこのようにアドバイスしてくれました。

「手伝いをして喜んでもらえることは、当たり前のことではないと思うよ。手伝いというのは、何よりも自分がやりたくてすすんでやるものだと思うよ。相手のことを考えながらね。」

この母の言葉は私の心にずしんとひびきました。そうか、何よりも大切なことの１つは『自分がやってあげる』という姿勢ではなく、『自分がやりたい』という心なんだと。その『自分がやりたい」と思う心は「相手のことを考える」ことから生まれてくるんだなあと。このことが本物のやさしさにつながるのだと強く感じたのです。私は母からやさしさのキーワードをもらった気がしました。

さて私は学校でＳＤＧｓについて学びました。SDGsとはサスティナブル　ディベロプメント　ゴールズの略です。世界を変えるための17のゴールと169のターゲットからなる国際目標です。2015年９月の国連サミットで採択されました。私たち人類は世界中でこんなにもたくさんの課題を抱えていることに驚きました。人や環境、住み続けられる街を作ること、高齢の方や障害をもつ方に思いやりの心を持って接するといった、これからの世界にとって大切な要素がいっぱいふくまれています。そのなかでも、私が関心をもったことは「差別をしない」ということでした。残念ながら、まだまだ世界にはたくさんの差別や偏見が起こっています。このことは、まさに私が考えている『本物のやさしさ』と関連していると思います。そしてまさに母から教わった『相手のことを考えること』が、差別や偏見の問題を解決することの第一歩ではないかと感じたのです。

母の言葉と、このＳＤＧｓの学習から、私は「本

物のやさしさ」の原点を学んだと感じています。本物のやさしさの原点とはなんでしょう。私は「相手を理解しようとする気持ち」だと思います。そしてそこから「自分が相手のためにやりたいという気持ち」が芽生えてくると思ったのです。『喜んでもらえるために優しくしてあげる』ということではなく、まずなによりも相手の状況や立場、思いなどを知ろうという気持ち、すなわち『他者理解』こそが『やさしさの原点』であることを私は学びました。もしかすると、これが本当のこたえではないかもしれません。でも私の中の大きなテーマである『本物のやさしさ』の答えのてがかりが見つかったような気がします。私はこれからも『相手がどのように思っているのか』を大切にしながら、さらに本物のやさしさについて自分の中でしっかりと答えを見つけていき、立派な大人に成長していきたいと思います。

「マスクを外せるようになった今」

清水南小学校　6年
鈴木　菫

学校から笑顔がなくなった。

何もわからないまま、二ヶ月の休校。

不安の中、始まった学校生活では、楽しみにしていた行事が全てなくなった。

あの日から三年。日本中どこでも、基本的にマスクを外しても良くなりました。しかし、国民のほとんどはマスクを外していません。もちろん、私の友達も外している子は少ないです。お店の店員さんなども、マスクを外している人がほとんどいません。どうしたらみんながマスクを外せるようになるのでしょう

私は普段、お店の中や屋外、学校が休みの日にはマスクを外しています。しかし、三年間マスクの下の顔を見せていなかった先生や友達にマスクの下の顔を見せるのは不安で、学校では、周りの友達や先生たちが外したら、私も外そうと思っています。ほとんどの友達もそうだと思います。顔を見られるのがはずかしいと思っている人もいるようです。この状況だとこれまでの生活が戻ってこなくなってしまいます。マスクを外さずに一年が過ぎ、小学校生活が終わってしまいそうで、とてもさみしいです。

運動会や修学旅行などの大切な行事さえ、マスクを外さずに終わってしまうと思うと、なんだか残念に感じます。一年前楽しみにしていた自然教室は、感染症対策でできないことがたくさんありました。楽しかった思い出も、マスク姿の写真しかありません。大きな声を出すことも許されず、マスクがなければもっといい思い出ができたな、と思ってしまいます。

私たちが大人になり、小学校生活を振り返ったとき、マスクの印象が強く、同級生の顔がわからなくなってしまったり、友達の顔を思い浮かべたときに、マスク姿だったりするととても寂しいです。

でも、今はちがいます。だから私は、みんなにも三年前と同じようにマスクを外してもらい、笑顔で楽しいたくさんの思い出を作りたいと思っています。

五月の運動会は、マスクをつけるかどうかは自由になりました。昨年は自分の種目だけマスクを外し、応援するときなどはマスクをしていました。今年は全体を通して、マスクを外している子が多かったです。みんなの笑顔、がんばっている真剣な顔、悲しいくやしい顔など、様々な顔がまた見られるようになって、うれしかったです。また、声が響きやすくなり、雰囲気が明るくなりました。みんなの顔が見えるだけで、マスクありよりもにぎやかで、テンションが上がり、ワクワクしました。小学校最後の運動会は、思い出に残る運動会になってうれしかったです。

秋の修学旅行は、東京方面に行き、みんなでホテルに泊まります。小学校で初めての宿泊行事です。ホテルの中でマスクなしで友達とおしゃべりをしたり、顔を見ながらゲームをしたりできるのも楽しみです。班でいろいろな場所に行って、マ

スクなしの思い出の写真をたくさん撮ってきたいです。そして、私たちが大人になって振り返ったときの思い出を、いい思い出にしたいです。

私は早くマスクを外し、みんなと楽しく学校での生活を送りたいです。誰もが簡単にマスクを外せる時はいつ来るのでしょうか。マスクについての考え方が変わった今、みんなの意識はどう変化しているのでしょうか。相手の意見を尊重し、理解しあいながら笑顔の学校生活を取り戻したいと思います。

一年後、みんなが笑顔の卒業写真を撮りたいです。マスク生活から卒業し、小学校も笑顔で卒業したいです。

「私の夢と目標」

静岡県立沼津商業高等学校　2年
園田　哩

皆さんは、夢や目標がありますか？将来あれをやりたい、これをやりたい、この職業に就きたい、これが欲しいなど。だれもが持ち、だれもが思うものではないでしょうか。中には現実的ではないこともあるかと思います。私は幼稚園に通っていた頃プリキュアになりたくて、七夕の日、短冊に書き、笹に吊るしたのを覚えています。人が夢や目標を持つのは自由なことだと思います。しかし、現実的でない夢や目標は、親や先生など、周りに止められることもあります。中学生や高校生は進路が大切な時期なので、「現実を見ろ」と、より言われることが増えるかと思います。私にも絶対に叶えたい目標があり、それと別に、少し弱気になっている夢もあります。しかし、「現実的じゃない」「無理だと思う」と何もしなければ、永遠に叶うことが無いものとなってしまいます。大事なのは、口に出し、行動することです。そこで、私も叶える一歩を踏み出すために、自分の夢と目標を主張します。

まず、目標は、父が営む飲食店を継ぎ、料理人として店を経営して、お客様を笑顔にすることです。この目標は、小学生の頃から変わっていません。父は沼津で居酒屋を経営しており、飛騨高山の地酒や郷土料理、そしてお店でしか食べられない、目玉商品のおでんを提供しています。幼稚園の頃から毎日のようにお店に通っていたので、私の中では第二の家のような存在です。仕入れ先での店員さんとの会話、おでんの仕込みや厨房に立って料理をしたり、お客様とお話をしている姿、時にはものすごくふざけるのに、気づいたら真面目に事務仕事をしていたり。お父さんっ子だった私は、そのような父の姿を小さいころからたくさん見てきました。私は妹と二人姉妹で男の兄弟がいません。いろいろな方に愛されている店を父の代で終わらせたくない。父のように料理をしたい、お客様と会話で盛り上がりたい。そう思ったのがお店を継ごうと思ったきっかけです。そのために沼商に入学し、現在商業、経営、マーケティングの勉強をしています。高校に入って初めて学んだ商業科目。大変なことが多いですが、とても楽しいです。あと二年間、商業の勉強をして、そのあと料理の勉強をして、いずれお店を継ぐことが目標です。そのために今は経営に必要なことをしっかり学び、卒業後は料理の専門学校に行けるように、今のうちに進路についてよく考えたいです。

そしてもう一つ、私の夢についてです。私の夢は、高校を卒業しても音楽を続けることです。私は吹奏楽部に所属しており、歌、ダンス、そして部活動での担当楽器であるテューバが大好きです。中学生の頃から吹奏楽部で活動し、より高いレベルで活動するために、沼商には学校裁量枠で入学、入部しました。現在テューバ歴５年目です。また、歌、ダンスの面ではインターネットで活動している、歌い手と踊り手が大好きで、家で真似して歌ったり踊ったりしています。だから高校で音楽を終わらせてしまうのは寂しく、もったいないと思っています。しかし、これらを続けるためには大きな壁が立ちはだかります。テューバは楽器一本で約１５０万円するとても高価な楽器です。歌、ダンスは独学で頑張らなければいけないこと、憧

れのネット活動者になるにはとてつもなく大きなリスクが伴い、非現実的であることが壁になっています。難しいことではありますが、それを乗り越えてでも続けたい、やってみたいと思っています。ですから、高校卒業後は調理の専門学校に通いながらも、アルバイトを行い資金を貯めたいと思います。とても過酷だとは思いますが、自分の夢の実現のために頑張りたいです。

目標や夢は誰もが自由に持っていいものです。誰が何を言っても流されず、自分のやりたいようにやり、人生を進んでいくことが大切だと思います。私の夢はとても難しく、目標に進みながらやっていくのは、とても困難なことだと思いますが、時間がどれだけかかっても、夢を捨てずに目標を叶え、充実した人生にしていきたいです。

「言葉の重さ」

清水町立清水中学校　3年
大森　幹太

皆さんは「言葉」というものをもちろん知っているだろう。「言葉」は誰もが口にするものであり、常日頃使わざるを得ない大切なものである。だが、その「言葉」が強く鋭い刃物であることに気付いている人は少ないのではないだろうか。

そのうえ、言葉の刃物で誰かを傷付けたとき、日本の法律上、暴力に対する刑罰よりも軽い刑罰で裁かれることの方が圧倒的に多い。果たして本当にそれでいいのだろうか。

近年、ＳＮＳ内の誹謗中傷で多くの人が自らこの世を去ってしまうようなニュースを多く見かける。それでもまだ暴言は暴力より軽い罪であると言えるのだろうか。

私はかつて自分がコンプレックスに感じていたことを友人から言われ暴力を振るってしまった。当然、先生に叱られたのだが、その際に先生に言われた言葉に私は疑問を感じた。

「何を言われても、手を出して相手を傷つけた方が悪い。」

暴力を振るうことは確かに良くないことで、それを肯定するつもりはない。けれど、相手を侮辱する暴言も同等に良くないのではないか。

言葉の暴力は、けがや傷と違い、一生心に残り続けるものであり、治るものでもない。実際、私はその場の軽はずみな気持ちで使われたその言葉を今でも覚えている。

一つの例を基に今回の経験とつなげて考えてもらいたい。

とある中学校のＡさんがＢさんに暴言もしくは侮辱するような言葉を投げたとしよう。そのことに腹を立てたＢさんがＡさんを殴ったり、蹴ったりと暴行を加えたら真っ先に先生や保護者に怒られるのはもちろんＢさんだろう。Ａさんが原因を作っているのにも関わらずＡさんが被害者のような扱いをされ、Ｂさんは加害者のような扱いをされるのだろうか。

答えは簡単だ。暴力は暴言より重い罪であると決まっていて、手を出すことの方が絶対的に悪だからだ。しかし、言葉の暴力も身体的な暴力も同等に強く痛いものであることを分かってほしい。

最初に挙げた誹謗中傷でこの世を去っている人がいることが良い例だ。誹謗中傷は暴力など直接的な暴行を加えてはいない。それなのに自殺してしまう人がいるのは言葉の強さを表している。言葉による攻撃で人を殺せてしまうのだ。怖いのは、言葉は子供から大人まで誰もが使い、力の差なく、誰かを追い詰めて殺してしまうことが可能なことである。言葉は最も使いやすく、最も強い凶器であるといえる。目に見えないこの凶器をどう扱っていくか、そこを考えなくてはいけない。

ある動画の中で、子供が母親に言われるまま紙きれに悪口を言い、母親はその度に紙を潰すという興味深い光景を見た。何回も潰したり折り曲げたりされた紙を広げてみると、紙は元のきれいな状態には戻らず、しわくちゃにされた跡は残ったままだった。母親は人の心というのはそれだけ柔らかく繊細なものであることを子供に伝えたかったのだと思う。

心に治らない傷を与える言葉という凶器を、私たちはどのように扱っていくべきなのだろうか。

まずは自分たちが言葉の危険性を理解することが大切であり、その使い方を見つめなおすべきである。また言葉という凶器がどれだけ危ないものなのかを学ぶ場をもっと作らなくてはならないとも思う。

ＳＮＳが普及し、感情の読み取りにくい言葉でのコミュニケーションが増えたり、安易な気持ちでの誹謗中傷がしやすくなっていたりする今だからこそ、全員で考えていかなければならない。

今後の自分たちの人生のために、周りの人のために、今一度言葉について考え、改めてほしい。私は未来のために言葉の使い方を改め、考えていきたい。そして、言葉の存在が人の心と心をつなぐために大切なものであることを伝えていきたい。

「失敗と後悔」

清水町立南中学校　３年
箕輪　優太

「ああ、あのときに戻りたい。もう一度チャンスがあれば、今度こそ勇気を振り絞って、思い通りに動いてみせる。それができたら、もっと誇れる自分になれていたのに。」そう思ったことはありますか。

こんなこと、いくら考えたところで時間の無駄で、過去は変えられないと分かっているはずなのに、いつまでも頭の片隅によぎって心が晴れない。僕は何度も同じような後悔を繰り返しています。きっとみなさんもこんな苦い思いをしたという経験があるでしょう。

僕はもうこんな後悔をしたくありません。では、どうしたらこんな思いをせずに済むのでしょうか。あのときに戻ってやり直したいという思いは「ネガティブ」な感情からにじみ出て、常日頃頭の中で連想されているものだと思います。「ネガティブ」な感情とは、悔しい思いや悲しい思いをしたという、負のイメージを抱いているということです。ネガティブな感情を抱いたときには、失敗や公開をして「ああ、あの時に戻りたい。」と思うのでしょう。

では、戻りたいと思うということは、「失敗」と「後悔」どちらなのでしょうか。「失敗」と「後悔」には、大きな違いがあります。「失敗」というものは大事な時に多大なミスをしてしまった、悔しいという思いです。しかし、「後悔」は、「自分はこうしたい。」そういう確かな思いを持っているのに、「もし失敗したら、みんなに笑われるかもしれない。バカにされて恥をかくかもしれない。」と勝手に思い込んで自分の心に嘘をつくことです。

では、どちらが後々悔しい思いが残るでしょうか。僕は断然「後悔」だと思います。失敗は誰でもするものです。そして、失敗して人から笑われても、そんな恥ずかしさはいずれ消えていきます。次に繋がり成功に近づいていくのだとわかるからです。では、なぜ後悔をしてしまうと暗い雨が心の中で、永遠にやまないのでしょうか。それは、後悔には「やってみたかった」という思いがあるからです。やりたい気持ちがあり、挑戦できるのにしなかったという悔しさや、どうしようもない自分への怒り。これが「後悔」の正体だと僕は思っています。

では、どうしたら「後悔」せずに済むのでしょうか。前述のとおり、「失敗」と「後悔」には大きな違いがあります。最大の違いは、「次に繋がるか否か」ということです。「失敗」からは必ずまなぶことあります。僕はバスケットボール部に所属していますが、「あのときはパスではなく、シュートをすべきだったな。次からは、積極的にシュートをしよう。」と、翌日の練習から意識するようになりました。このように、「失敗」からは、パズルのピースを見つけ出し、成功に近づくことができるのです。しかし、「後悔」からは何も学べません。ただただ何をやっていたんだ俺は、という思いが頭の中に残り続け、足が止まり、そこから離れられなくなってしまうだけです。大事なのはまず「失敗」を恐れず、「挑戦」することです。仮に失敗し

て、周囲に笑われても、非難されたとしても、自分の思いを貫くことです。他人の目や周囲の評価ばかり気にすると、自分を見失います。自分にとっての正解よりも他者が求める正解を先に探すようになります。だから、まずは、自分の信念にしたがって挑戦してみるのが手っ取り早いと思います。仮に失敗しても、きっと成功への道筋が見えてくるはずです。

僕はこの春、三年生に進級しました。小学校から慣れ親しんだ友人と過ごせるのも今年が最後です。生徒会、部活動、受験、そして友人との思い出作りに、全力を尽くし、そして卒業式では、自分色の凛とした花を咲かせたいです。卒業後は、何事にも強い心を持って挑戦し、誇れる自分になることを、ここで誓います。

「余命一週間の使い方」

清水町立清水中学校　3年
山本　陽夏乃

もし余命一週間を宣告されたとしたら、あなたはその時間をどう過ごしますか。普段のように、適当にテレビを見たり、暇つぶしにスマホをいじったりして一週間を終える人はいないと思います。残り少ない人生を嘆いたり、絶望したりするかもしれませんが、最終的にはきっと、自分が心から楽しめることをして、会いたい人に会ったり、好きなものを食べたりして過ごすのではないでしょうか。

しかし、不慮の事故や事件に遭って命を落とした場合はそういうわけにはいきません。これから成し遂げたいことや、やりたいことをやれずに、人生の幕を閉じることになってしまいます。また、自分の将来、未来のためと、生活を切り詰めて節約したり、時間を削って勉強したりしていたとしたら、「もっと今の時間を大切にするべきだった」と後悔するかもしれません。私たちの時間は有限です。私たちは、明日死んでしまう可能性もあるのです。私たちが心から幸せだったと思える人生を送るには、その事実を自覚することがとても大切だと思います。

私は以前、交通事故に遭ったことがあります。車三台の玉突き事故です。私は事故に遭う瞬間まで、自分が被害者になるとは思ってもいませんでした。私の母は弁護士事務所に勤めていたことがあり、交通事故の裁判を何度も経験してきたそうですが、加害者も被害者もほとんどの人が、まさか自分が当事者になるとは思っていなかった、と言うそうです。交通事故のように、なんの前触れもなく訪れた出来事で死んでしまった人は、死ぬ直前まで自分が死ぬとは思っていなかったことと思います。日頃から死について考えている人は少ないでしょう。私も交通事故に関するニュースは何度も見たことがありますし、学校からも頻繁に交通事故に注意するよう促されていましたが、他人事ではないんだと思えたのは、自分が交通事故に遭ってからでした。

意識してみると、ニュースで報道される玉突き事故では、ほとんどの場合に重傷者、重体者、最悪の場合は死亡者が出ています。私は、もしも事故を起こした人の車がもう少しでも速いスピードでぶつかっていたら、もしも私がシートベルトを締めていなかったら、と思うとぞっとします。何かが少し違っていたら、私はあのとき死んでいたのかもしれないのです。

十代の死因で、自殺の次に多いのが不慮の事故だそうです。一分に一件というとてつもない頻度で交通事故は起こっていて、一日に約十人が命を落としています。どういうことなのかあまり実感をもてない人もいるでしょう。例えば、宝くじを想像してみてください。大金が当たる確率はものすごく低いですが、一攫千金を狙って買っているという家庭もあるのではないのでしょうか。その宝くじで、一分に一人一億円が当たる、一日に十人は十億円が当たる、としたら、どう思いますか？いつ誰が当たってもおかしくない、もしかしたら自分も当たるかもしれない、という期待に胸を膨らませる人が多いと思います。これと同じように、

交通事故は、いつ誰が遭ってもおかしくないのです。今、この瞬間にも、事故によって苦しんでいる人がどこかにいるのです。

日本には戦争がなく、治安も比較的良好ですが、平和な国にいる私たちにとっても死は決して他人事ではありません。余命一週間を宣告されたとしたら、あなたはどのように過ごすでしょうか。きっとそれは、あなたが人生において本当にやりたいことだと思います。しかしそれは、一週間ではとても時間が足りないのではありませんか？人生は一度きりで、過ぎた時間は戻りません。その時間は、病気や不慮の事故で亡くなってしまった人が、どんなに願っても手に入れることができなかったものです。もしも惰性でスマホを見てしまう、というようなことがあれば、意識して時間の使い方を改善するべきだと思います。また自分と向き合い、人生で何を成し遂げたいか、自分が何をしているときが幸せなのかを考える時間も大切だと思います。未来のために、と今の自分を犠牲にしているような人は、その未来が来る前に命が終わってしまうかもしれないということを視野にいれ、「未来の自分ために使う時間」と「今の自分のために使う時間」の配分を見直すべきだと思います。私たちの価値観はそれぞれ違うので、何が好きなのか、どうしているときが幸せなのかは人それぞれ異なります。自分が死ぬときに、この人生には意味があった、幸せだった、と後悔のないようにするためには、自分が本当にしたい行動をとることが大切だと思います。あなたは、この人生で何をしたいですか？

「好きなことを堂々と」

清水町立南中学校　３年
久保田　元

自分が好きなことをしているとき、もしくは一生懸命に取り組んでいるときに、周りからどう見られているだろうか。僕は周りの人に応援してほしいと思う。一生懸命に何かに打ちこむことは決して悪いことではないし、技術が進歩し、物事が簡単にできるこの時代においてはむしろ大事なことだと思う、だが、僕たちはそううまくはいかない。

中学一年生のとき学年主任の先生に言われた言葉がある。「みんなは全力でやることを抑えている」当時の僕もそう思った。周りはグループ学習の場面でほとんどの場合本気でやろうとしない。ひどい場合は完全に他人任せ。理由は分からないけれど、学年の中で「ほどほどでいいや」という風潮になっている。全力を出そうとすると、大抵の場合、笑われてしまう。

これは僕の学校に限った話ではない。中学生の六割は多数派の意見に賛同するのが望ましいと考えている。つまり、なんとなく周りに合わせている人が多いということだ。学校ではよく「のびのびした教育を」などと言っているけれど、この小さな学校という社会も、協調性は必要ということだと思う。

他にも好きなことをやっているとき、社会ではこのようなことがある。

僕は動物が好きなので、よく動物に話しかける。その日、猫に話しかけたとき、「あいつヤバッ」と言われた。「キモい」「ヤバイ」「死ね」これらは人を罵るときに使う言葉だ。本来なら簡単に使ってはいけない言葉なのに、今や完全にコミュニケーションの一部となっている。そして、人が好きなことをしているときにも平気で使われる。間違ったことはしていないのにも関わらずだ。

学校だけの話ではない。僕は何かを眺めることが好きだから、誰かの迷惑にならないのであれば、コンクリートの上に寝転がって忙しそうに動き回るアリを眺めたい。でも、これを社会の目で見ると不審者らしい。これを読んでいるあなたもそう思うだろうか？僕はそんなのおかしいと思う。警察沙汰じゃないし、迷惑にもなっていない。だからおかしい。好きなことが堂々とできない、なんて生きにくい世の中なのだろうと思う。

どんなことにおいても、人数の多い方や大衆側

の方が強い。一人一人の個性だってそう。
突出しすぎると、社会で孤立する。でも、僕は突出した人がいいと思う。人類の歴史で人々が自由な意見をもち、自由に発言できるようになったのはごく最近だ。なのに、協調を求める。せっかく自分だけの権利があるのだから、その権利を有効に使いたい。「自分らしくいる」これが大事。

だから、今が勇気を出すときだ。好きなことをするために。僕らは本当は好きなことをしたいと願っている。でも今は周囲からの目がある。親や友達、ご近所さん。見ず知らずの人やＳＮＳの人。僕らは常に大勢の人から見られている。それに縛られてしまい、好きなことができない人だっている。

この状況を打開する方法は二つある。「周りを動かす」ことと、「自分が勇気を出す」ことだ。でも「周りを動かす」ことは簡単ではない。中学生である僕らが、社会全体からなるこの考えを覆すために世論を操作することは難しい。だから、「相手を変えるなら自分から」という言葉のとおり、中学生のｂ蔵ができることは、「自分が変わること」だ。

僕が大好きな映画で「きっと、うまくいく」という映画がある。その映画の主人公が言っていた。「そのことがたまらなく好きなのに、うまくいかないのは心が臆病だからだ。」と。大抵のことは勇気を出せばできる。たとえ勉強が嫌いでも「やってみるか」という小さな勇気があれば乗り越えられる。たとえ虫が苦手でも手を伸ばすだけで触れる。だから、この言葉はとても的を射た意見だと思う。

その小さな勇気、発した一言で社会が変わるかもしれない。そう思えば、実行につながる。でも、思うだけじゃ何も始まらない。だから、夢を叶える大前提として、勇気がいる。その勇気がないと道は広がらない。地図みたいなものだ。そして言葉は掘削ツールみたいなものだと思う。言葉にはいい意味でも悪い意味でも世界で一番のパワーと精神を変える力がある。悪い使い方をしたら道は閉ざされてしまう。僕が言いたいのは、誰かが勇気を出して変わろうとしているとき、その勇気を挫かないでほしいということだ。だから言葉の使い方を見直してほしい。

この文章を通して、好きなことを堂々とするために勇気を出してくれればいいと思う。僕だってこの文章を通して言いたいことを言えた。おかしいことはおかしいと言っていい。くだらない「当たり前」を無視することで好きなことを堂々とできるはずだ。

※　提出原文のまま記載、発表順に掲載しています。

青少年健全育成会　スローガン

「　育てよう！青少年の豊かな心と大きな未来　」

町制 60 周年記念事業

わたしの主張発表大会 2023 主張発表集

令和５年６月 17 日

作　成　清水町教育委員会社会教育課
清水町教育委員会
清水町青少年健全育成会
静岡県駿東郡清水町堂庭６－１
電話０５５（９７２）６６７８